

# 怪人、帝都を席卷す

—『怪人二十面相』と『少年倶楽部』の地政学—

驚 谷 花

## 1

その頃、東京中の町といふ町、家といふ家では、二人以上の人が顔を合はせさへすれば、まるでお天気のアラフォーでもするやうに、怪人『二十面相』の噂をしていました。

江戸川乱歩のいわゆる『少年探偵団』シリーズの第一作である『怪人二十面相』（大日本雄弁会講談社発行『少年倶楽部』昭和11年新年号～12月号連載）の、あまりにも有名な冒頭部分である。この書き出しからはじまる連載第一回（『少年倶楽部』昭和11年新年号掲載）では、怪人二十面相とは「老人にも若者にも、富豪にも乞食にも、学者にも無頼漢にも、イヤ女にさへも、全くその人になり切つてしまふことができる」変装の名人で、現金には興味を示さず、「宝石だとか、美しくて珍しくて、非常に高価な品物を盗むばかり」の盗賊であると紹介される。たそがれの町でささやき交わされる流言飛語から、ひとりの正体不明の怪人の輪郭が、徐々に形づくられてゆく。

昭和11年（1936年）に『少年倶楽部』に初登場した怪人二十面相は、以後、昭和12年（1937年）の『少年探偵団』（『少年倶楽部』昭和12年新年号～12月号連載）、昭和13年の『妖怪博士』（『少年倶楽部』昭和12年新年号～12月号連載）と、みたび誌上に復活し、明智小五郎と少年探偵団を相手に、「力と力、智恵と智恵、火花を散らし、鎬を削る、一騎打ちの大闘争」\*1を演じるのだが、それにしても、江戸川乱歩の『少年探偵団』シリーズが、昭和11年から13年にかけての3年間に発表されたことは、あらためて注目すべき事実である。

この時期、児童出版文化は、一つの重要な転機をむかえつつあった。まず、発表媒体となった『少年倶楽部』にとっても、『少年探偵団』シリーズ三部作をはじめ、

高垣暉『怪傑黒頭巾』（昭和10年新年号～12月号連載）、平田晋策『昭和遊撃隊』（昭和9年新年号～12月号連載）、久米正雄『青空に微笑む』（昭和9年新年号～12月号連載）、南洋一郎『海洋冒険物語』（昭和10年新年号～12月号連載）、海野十三『浮かぶ飛行島』（昭和13年新年号～12月号連載）などの大ヒット作がたてつけに掲載された昭和9年から13年までの5年間は、もっとも誌面が充実した時期だったといえる。また、『少年倶楽部』に代表される「大衆向け」「通俗」の少年少女雑誌のみならず、大正期に勃興した「芸術的」「文学的」な児童文学も、この時期、一つのピークを迎えていた。昭和10年頃から勃興したいわゆる「生活綴方運動」は、豊田正子の『綴方教室』と、大関松三郎の生活詩集『山芋』に結実し、また、昭和12年（1937年）の「日本少国民文庫」をはじめ、児童向けの文庫、叢書が相次いで刊行されたのもこの時期だった。管忠道は、昭和13年前後の状況を以下のように回想している。

日本の文化・文学の歴史を通じて、その頃のように、文学・映画・演劇などで子どもを描いた作品が世評をわかせた時代は、かつてなかったことである。

（中略）

「日支事変」勃発前後の緊迫した時局を背景に、子どもの問題がにわかに人びとの心をひきはじめていたのであった。<sup>\*2</sup>

しかし、このように児童出版文化がピークを迎える一方では、国家による文化統制がにわかに厳しくなりつつあった。昭和13年には、まず、『少年倶楽部』をはじめとする少年少女雑誌、赤本漫画などの通俗読み物に対する統制が開始される。そのきっかけとなったのは、昭和13年10月末に内務省警保局図書課より発表された「児童読物改善ニ関スル指示要綱」だった。「要項」のおもな内容は、少年少女雑誌における自家広告、付録、および「内容ノ野卑、陰惨、猟奇的ニ渉ル読物、過度ニ感傷的ナルモノ、病的ナルモノ、恋愛描写」の廃止、仮作物語（フィクション）と長編漫画の掲載制限、それらのジャンルに代わって、「少国民の生活に近い物語または日本国史よりの建設的なる部分に取材せるもの、探検譚、発見譚、科学的知識に関するもの、歴史的知識に関するもの、古典を平易に解せるもの、事変記事」などを充実させること、さらには「赤本漫画及ピコノ種程度ノモノ一切」の禁止などを指示するもので、ここに示されている諸方針は、これ以降、内務省警保局によって進められる児童読物浄化運動のひとつの規範となった。

「要綱」発令をひとつのきっかけとして、児童向け出版物に対する内務省の統制はみるみる厳しさを増し、編集・発行する側の過剰な反応がそれに拍車をかけた。

山本有三、小川未明、坪田譲治、百田宗治、波田野完治などの児童文学者たちは、商業第一主義の俗悪児童読物の横行をおさえ、それまで劣勢におかれていた「良心的な文化性の高い」児童文学を復権させるという目的のもとに、むしろ積極的に児童読物浄化運動に協力してゆき、一方、少年少女雑誌の編集者たちはひたすら守勢に回るばかりだった。児童読物の描く世界は狭まる一方となり、『妖怪博士』連載終了からわずか2年後の昭和16年（1941年）には、江戸川乱歩が次のように回想するような状況が訪れていた。

当時の編集者の神経質になっていたことは驚くべきもので、犯罪は全然書けなかったし、作中に『ルンペン』を登場させても、書き直しを命じられた。日本国内に無職の遊民が一人でもいてはいけないからである。<sup>\*3</sup>

乱歩は、『怪人二十面相』の連載開始をめぐっても、「私は最初少年ルパンものをねらって、題も『怪盗二十面相』とつけたのだが、そのころの雑誌倫理規定は、今よりきびしく、『盗』の字がいけないということで、語呂は悪いけれど、『怪人』と改めた」と記しているが<sup>\*4</sup>、その5年後には、もはや犯罪者どころか、「日本国内に無職の遊民が一人でもいてはいけない」状況が訪れていたのだ。したがって、怪人二十面相は、日本国内でその存在が許されているぎりぎりの刻限に登場してきたといえる。

そして、『少年倶楽部』という雑誌の資質にも、怪人二十面相のいかがわしさとは本来相容れないものがあった。「俗悪」、「通俗」と非難されつつも、『少年倶楽部』の編集方針は、必ずしも菅忠道らが言うような商業第一主義とは言いがたく、創刊まもなく巻頭に掲げられた「雑誌教育は学校教育を補助するという所の立場をとらなければならない」<sup>\*5</sup>という「編集方針」は、昭和10年代前半の黄金期にいたるまで、むしろ一貫して引き継がれていたといえるのである。たとえば、昭和初期の『少年倶楽部』の黄金時代の基礎を築いた名編集長とされる加藤謙一は、佐藤忠男のインタビューに答えて、教員から雑誌編集者に転身した動機を次のように語っている。

東京あたりの雑誌は文学者が作っているのは間違いだ。教育者が作るべきだ。そして出来れば日本中の子供に教育者が作った雑誌をよませるべきではないか。子供のほんとうの気持ちをいちばんよく知っているのは、なんといっても教師なのだから。それで、よし、それならば東京に出て雑誌記者になろう、と決心して上京したのです。<sup>\*6</sup>

また、佐藤忠男は、『少年倶楽部』が最も多くの発行部数を誇っていたと思われる時期に連載された小説』に関して、以下のように述べている。

佐々木邦の穩健なりベラリズムから、積極的に反米反ソの国家主義を鼓吹した山中峯太郎や平田晋策の冒険小説までの幅があったが、そこに共通していることは、どの作品をとりあげても、たいてい、なんらかの明確な主張を持っていることであった。佐藤紅緑が力説する友情と艱難汝を玉にする主義。大佛次郎の力説する、常に弱い者の味方であれ、という武俠精神。高垣眸や南洋一郎の冒険小説の主題である勇氣と男らしさ。島田啓三の『冒険ダン吉』に描かれている南進思想と、奔放闊達な創意工夫による建設精神など、それらはいずれも、かなり正面きった思想性に貫かれたものであった。<sup>\*7</sup>

娯楽性を追求しつつ、一方では何らかの主義主張を強く訴えかける連載小説。歴史、地理、経済、自然科学などの実用知識をふんだんに盛り込んだ「ダイヤモンド記事」。「少年道德討論会」から「滑稽和歌」までの硬軟のパラエティに富んだ投稿欄。日本および世界各地の地理・歴史・風俗・習慣を伝えるグラビア写真。そして、いたるページで目につく「大日本中學會」、「英語通信講座」、「最新中學講義録」などの通信教育、参考書の広告の数々。『少年倶楽部』という雑誌は、当時の少年たちにとっての一大エンターティメントであるのと同時に、「校外教育の場」としての機能を真面目に果たしてもいたのだ。主要な執筆陣にも、吉川英治、大佛次郎といった人気職業作家とともに、元教員の高垣眸、ボーイスカウト運動家の池田宣政（南洋一郎）といった教育関係者、あるいは、元暁民共産党員で軍事評論家に転じた平田晋策といった「政治運動社会運動の実践者」が多数参加していることは、すでに高田宏や佐藤忠男らによって指摘されている。<sup>\*8</sup> このような『少年倶楽部』という場であって、江戸川乱歩と怪人二十面相の登場は、まさに異物の侵入にほかならなかった。

江戸川乱歩の『少年倶楽部』起用をめぐって、当時の編集部員たちは、「よくもあの異色な大人ものの作家に目をつけて、こちらの陣営に引っぱりこんできたものだと思うよ」、「乱歩先生といえば、なんとも異様な妖奇の世界を描いて注目されていた作家ですから、この方に少年ものをというのは一見なじまないのですが、須藤さん（当時の編集長）はそんな常識はべつにして、とにかく当たってみようと思った」といった回想を語っている。<sup>\*9</sup> しかし、乱歩と『少年倶楽部』の出会い、結局は『少年探偵団』三部作の大ヒットという双方にとって幸運な結果をもたらし、両者の関係は長く続くことになる。これ以降、乱歩は戦前・戦中から、戦後の昭和

30年代にいたるまで、ほとんど少年探偵団ものの執筆のみに専念してゆくのだが、それにしても、『怪人二十面相』連載当時の江戸川乱歩が、『少年倶楽部』の内部においてはかなり特異な存在であったことも確かであるだろう。

では、怪人二十面相の侵入は、『少年倶楽部』という領域に、さらには昭和11年の児童出版文化という領域にどのような葛藤をもたらすものであったのか。そして、その葛藤のさなかで、招かれざる客、怪人二十面相の存在と、その犯罪に子どもたちが巻きこまれる物語を成立させていたのはいかなる欲望であったのか。それを分析することが本稿の目的である。

## 2

さて、怪人二十面相の第一、第二の犯罪の舞台となる麻布の大邸宅、羽柴邸は、次のように紹介される。

麻布区の、とある屋敷町に、百メートル四方もあるような大邸宅があります。四メートル位もありさうな、高い高いコンクリート塀が、ブーツと、目もはるかに続いてゐます。いかめしい鉄の扉の門を入ると、大きな蘇鉄が、ドッカーリと植わってゐて、その茂った葉の向ふに、立派な玄関が見えてゐます。これは、実業界の大立者、羽柴壮太郎の邸宅です。羽柴家には、今、非常な喜びと、非常な恐怖とが、織りまざるやうにして、襲ひかゝつてゐました。<sup>\*10</sup>

「喜び」とは、中学卒業と同時に家出をして、南洋に渡航したきり行方知らずになっていた長男の羽柴壮一が、ボルネオのサンダカン島で成功し、現在は大農園主になっていることを知らせ、十年ぶりに帰朝するという便りをよこしたこと。そして、「恐怖」とは、羽柴家所蔵の六個のダイヤモンドを、「無償にてゆずりうける決心をした」との怪人二十面相の予告状が届いたことである。不気味な犯罪予告におびえつつも、長男の帰宅を待ちこがれる羽柴家の人々の前に、壮一青年はさっそうと姿を現す。

旅客飛行機から降り立つた壮一君は、予期にたがはず、実に颯爽たる姿でした。焦茶色の薄外套を小脇にして、同じ色の二重襟の背広を、キチンと着こなす。折り目の正しいパンツが、スーッと長く見えて、映画の中の西洋人みたいな感じがしました。

同じ焦茶色のソフト帽の下に、帽子の色とあまり違はない、日に焼けた赤銅色の、でも美しい顔が、ニコニコ笑ってゐました。濃い一文字の眉、よく光る大きな目、笑ふ度に見える、よく揃った真っ白な歯、それから、上唇の細く刈り込んだ口髭が、何ともいへぬ懐かしさでした。\*11

ここに描写される羽柴壮一青年の肖像は、『少年探偵団』シリーズ全四十作あまりを通じて、おそらくもっとも完璧かつ輝かしいヒーロー像である。しかし、このような完璧な肉体をもち、「徒手空拳、南洋の野蛮島へ押し渡って、今日の成功を収めた程の快男児」と紹介されるようなヒーローは、当時の『少年倶楽部』読者にとっては、ごく馴染みぶかい存在だった。

そもそも「南洋」とは、『少年倶楽部』の連載作品全体を通じ、日本人ヒーローの活躍のための特権的な舞台であった。たとえば、島田啓三の漫画『冒険ダン吉』の「南の島に日の丸をかかげる」少年英雄や、山中峯太郎の冒険小説『亜細亜の曙』の、南洋を植民地化しようとする白人の陰謀を阻止する帝国軍人たちの活躍は、毎月掲載される多数の読み切り小説においても繰り返し反復されることになる。また、大佛次郎の『日本人オイン』、高垣暉の『渦潮の果』のような明治維新以前の日本を描く時代小説においてすら、「南洋」は日本人ヒーローの最終的な活躍の舞台として夢想されていたのだ。\*12

また、本編の主人公とおぼしき名探偵明智小五郎は、羽柴家の盗難事件の時点では、「満州国政府の依頼を受けて、新京に出張中」とされ、日本に不在である。ここで、「大陸」という、『少年倶楽部』におけるもう一方の特権的な場所が示される。「南洋」と同等に、支那、満州からロシアにいたるまでの「大陸」もまた、『少年倶楽部』のヒーローたちの冒険と活躍の舞台であった。たとえば、『少年倶楽部』最大のヒーローのひとりであった「わが日東の剣侠児」本郷義昭少佐の「中国大陸を疾駆する軍事探偵」のイメージは、『怪人二十面相』の明智小五郎にも引きつがれている。また、二十面相が狙う羽柴家所蔵の六個のダイヤモンドが、「ロシアの帝政没落ののち、ある白系露人が旧ロマノフ家の宝冠を手に入れて、飾の宝石だけを取りはずし、それを支那商人に売り渡したのが、回り回って」羽柴氏の手に入ったという来歴をもつこと、つまり大陸から日本に渡来してきたものであることにも注目したい。日本人ヒーローの活躍の舞台となり、また日本＝「内地」に富と資源をもたらす土地としての「大陸」と「南洋」という、『少年倶楽部』の世界地図は、『怪人二十面相』という作品内部の地理空間を規定するうえでも、大きな役割を果たしている。

しかし、「南洋から凱旋してきたヒーロー」のステレオタイプとも見える羽柴壮

一青年とは、実はダイヤモンドを狙う怪人二十面相の変装であり、その完璧なヒーローの貌も、二十面相が「十年のあいだに、壮一君がどんな顔にかわるかということ想像して」つくりあげた仮面にすぎない。ヒーローの偽りの凱旋劇は、羽柴家の一連の盗難事件の解決後、伊豆の「美術城」の盗難事件で再び演じられることになる。二十面相は、今度は満州から帰還した明智小五郎に変装して、用心堅固な「美術城」に侵入し、またしても国宝級の名画の数々、美術品の数々を強奪することに成功する。『怪人二十面相』の世界は、一方では『少年倶楽部』の世界地図を受け容れてはいるが、その一方で、内地における二十面相の跳梁を挿入することによって、かつての楽天的な領土拡張の夢想に、ある陰りと歪みをもたらすのだ。

### 3

『怪人二十面相』において、ヒーローたちの外地での痛快な大活躍は、一方では、内地でのヒーローの不在という事態をもたらす。南洋から凱旋してくるはずの羽柴家の長男壮一は、実際には十年前に行方不明になったきりであり、二十面相を迎え撃つべき明智小五郎もまた不在である。ヒーローたちが南洋や大陸に躍進してゆく一方で、留守にされた東京は、得体のしれない怪人の侵入に脅かされている。そういった図式を描いてみるができるだろう。

ここで、不在のヒーローに代わって怪人二十面相と対決するのは、羽柴家の次男壮二君と、明智探偵の助手の小林少年という二人の少年たちである。しかし、少年たちと二十面相の間には、探偵と犯人、警察と犯人といった明快な敵対関係ではなく、ほとんど共犯者同士ともいえるような奇妙に親しげな絆が生じる。それがもともと顕著に現れているのが、羽柴壮一青年の帰宅が予定されている日（二十面相の盗難予告の日でもある）の前夜に、羽柴家次男の壮二君が見る夢のエピソードであるだろう。

壮二君は昨夜恐い夢を見ました。『二十面相』の賊が、どこからか洋館の二階の書斎に忍び入り、宝物を奪ひ去つた夢です。

賊はお父さまの居間にかけてあるお能の面のやうに、不気味に青ざめた、無表情な顔をしてゐました。そいつが、宝物を盗むと、いきなり二階の窓を開いて、真暗な庭に飛び降りたのです。<sup>\*13</sup>

目覚めた壮二君は、すぐに起き出して、夢の中で二十面相が飛び降りた窓の下にある花壇に、土蔵からこっそり持ち出した鉄の罫を埋め、胸をときめかせながら、

賊の訪れを待つ。そして、現実の予告の晩、壮二君の見た夢そのままに、羽柴氏の書斎からダイヤモンドを盗み出した二十面相は、二階の窓から花壇に飛びおり、そこに待ちうけていた罠に足を踏み入れるのだ。

警察も、家長たる羽柴壮太郎氏も、二十面相の侵入と逃亡をなすすべもなく見送るばかりである中で、ただ壮二君の「子どものむじゃきな思いつき」のみが、わずかながらも二十面相の足をとどめる効力を発揮する。しかし、この「思いつき」が、決して論理的な思考能力に基づくものではなく、合理性を欠いた夢の延長であることに注目したい。そして、広大な羽柴邸の庭のただ中に、たった一つだけ仕掛けられた罠が、もののみごとく二十面相の足をとらえるという奇蹟は、無邪気な「童心」の称揚というよりは、むしろ怪人と子どもとを結びつける不思議な絆を暗示しているようだ。

事件の端緒において、羽柴家を襲っていた「喜び」と「恐怖」とが、結局は羽柴壮一＝怪人二十面相という同一人物に向けられたものだったことを思い起こしてみよう。花壇に罠を埋め、二十面相の訪れをわくわくと待ちこがれていた壮二君は、同じ日、帰還した兄壮一を空港まで迎えに行った帰り道で、前の車に乗った兄の後姿をあこがれをこめて見つめつづける。「車が走る間も、うしろの窓からすいて見える兄さんの姿を、ジッと見つめていると、何だか嬉しさがこみ上げてくるようでした。」\*14 子どもたちにとって、怪人二十面相は凶悪な賊であり、恐ろしい幼児誘拐者であるばかりではなく、どこか懐かしく、慕わしい存在でもあるのだ。

松山巖は、『乱歩と東京』において、戦前の『少年探偵団』シリーズが書かれたのと同時期の少年たちが、熾烈な受験戦争の渦中に巻き込まれ、学歴社会にとらわれていたことを指摘している。

職人の子が職人とならず、商人の子が商人とならず、農民の子が農民にならず、誰もが一樣に学歴社会の波にもまれていく。学歴社会が目標とした人間は、日本を指導するエリート、すなわち人を管理する能力にたけた人物像であった。  
(中略)

少年探偵団の団員たちは勉強部屋に囚われるばかりか、その将来像からも囚われる。そのとき、彼らは怯え、囚われた環境から脱け出ようとする。\*15

『少年倶楽部』の内部でも、少年とは、誘惑を退け、艱難辛苦をしのいで勉強し、やがては日本を背負って立つエリートになるべき存在として描かれることが多かった。地方から上京してきた少年が、都市の巷にはびこるいかがわしい娯楽や、不良少年の誘惑、悪意あるルンペン・プロレタリアートの妨害などにうち勝って進学し、



ついに軍人、実業家、発明家といったエリートになるという成長物語は、佐藤紅緑の『ああ玉杯に花うけて』を初めとして、虚実を問わず、たえず誌上で再生産されつづけていた。それらの物語には、たいていの場合、次のような大団円が用意されていた。

読者諸君、回数にかぎりあり、この物語はこれにて擱筆します。もし諸君が人々の消息を知りたければ六年前に一高の寮舎にありし人について聞くがよい。青木千三と柳光一はどの室の窓からその元気のいい顔をだしてどんな声で玉杯をうたったか。それから一年おくれて入校した生蕃とあだなのつく阪井巖という青年が非常な勉強をもって主席で大学にはいったことも同時に聞くがいい。

さらに安場のことがしりたければ黙々先生をたずねなさい。先生は多分こういうだろう。

「安場ですか、あれはいまロンドンの日本大使館にいます」と。<sup>\*16</sup>

ここで露骨なまでに称揚されている、名門進学校→帝国大学→エリートという道程は、日本の少年のたどるべき最も望ましい進路として、『少年倶楽部』の多数の連載、読み切り小説作品において繰り返し提示され、絶対的な価値を与えられてゆくことになる。そして、誌面に挿入されるおびただしい通信教育、講義録、参考書の広告の数々も、その進路の絶対性を現実面から補完する役割を果たしている。『少年倶楽部』の成人ヒーローたちが、南洋、大陸といった「外地」で痛快無比の活躍を演じる一方、「内地」の少年たちは、未来のヒーローを完成させるために敷かれた進路を、必死の形相で歩んでいたといえる。

では、そのような進路の枠内に位置づけられた少年たちにとって、二十面相とは何者であったのか。神出鬼没の怪人犯罪者。幼児誘拐者。そして、浮浪者、乞食、チンドン屋、紙芝居屋といったルンペン・プロレタリアートの首領でもある二十面相は、あるべき国民像からは大いに逸脱した存在であるばかりか、国宝を次々と強奪し、ついに帝国博物館の所蔵品をことごとく我が物にしようとたくらむ「国家の敵」でもある。しかし、『少年倶楽部』に登場するその他の「国家の敵」とは異なり、二十面相は、日本以外で帰属すべき別の国籍、別の役職、別の主義主張などを持っているわけでもないのだ。『帝国の銀幕』の著者ピーター・B・ハーイは、当時の国策映画における「スパイ防止キャンペーン」と、『怪人二十面相』の作品世界とに共通の基盤を見いだしているが<sup>\*17</sup>、しかし、結局は他国の公務員にすぎない「某国のスパイ」という身分と、怪人二十面相はおおよそ無縁の存在であるだろう。

高桑法子が『怪人二十面相論』において指摘するように\*18、「自分で自分の顔を忘れてしまった」二十面相は、何一つ確実なアイデンティティをもたず、常に偽物として生きるほかはない存在である。しかし、アイデンティティをもたないこと、偽物であることこそが二十面相の唯一のアイデンティティであり、その最大の武器である「老人にも若者にも、富豪にも乞食にも、学者にも無頼漢にも、イヤ女にさへも、全くその人になり切つてしまふことが出来る」変装能力を支えている。かくして、二十面相の、変装による社会への介入は、『少年倶楽部』のヒーローたちの完璧な正統性を保証していた「日本」、「帝国陸軍」という場や、エリートとしての社会的地位といった帰属の確実さを、深く動揺させるのである。

そして、作品中の子どもたちは、なかば自律的に、二十面相の犯罪に、そして変装に巻きこまれてゆく。二十面相に誘拐された羽柴壯二君は、子どもの乞食に身をやつしてわが家に戻ってくるし、小林少年は木彫の観音像に変装して、二十面相のアジトに潜入することに成功する。彼らの行く先には、緑したたる南洋の島々や、夕日に赤々と彩られる大陸の原野といった輝かしい舞台は用意されておらず、ただ、さびしい草むらや林に覆いかくされた怪人の隠れ家や、ひっそりと待ちうけているばかりである。しかし、他から規定されるアイデンティティを避け、曖昧なままの自己を保つことを夢みる者たちにとって、二十面相のアジトも、切実な欲望から生みだされた一種のユートピアであったといえる。子どもたちもまた、もう一人の怪人二十面相であったかもしれないのだ。

## 注

- 1 江戸川乱歩『怪人二十面相』第一回（『少年倶楽部』昭和11年新年号掲載）
- 2 管忠道『日本の児童文学』（大月書店、1956年）p.308
- 3 江戸川乱歩『探偵小説四十年』（沖積舎、1985年）
- 4 『探偵小説四十年』p.311
- 5 「本誌の編集方針」『少年倶楽部』大正4年4月号
- 6 佐藤忠男「少年の理想主義について」二上洋一編『少年小説の世界』（沖積舎、1991年）pp.48～49
- 7 「少年の理想主義について」p.44
- 8 高田宏『われ山に帰る』（岩波書店、1990年）p.157を参照。
- 9 座談会『『少年倶楽部』の思い出』尾崎秀樹『思い出の少年倶楽部時代』（講談社、1997年）pp.309～310
- 10 前掲『怪人二十面相』第一回

- 11 前掲『怪人二十面相』第一回
- 12 たとえば高垣眸『渦潮の果』（『少年倶楽部』昭和11年9月号～12月号連載）の最終回（昭和11年12月号）においては、「（豊臣）秀頼様を南洋諸島の大将軍に盛りたて奉る」真田幸村の熱き夢が語られるという展開が用意されている。
- 13 前掲『怪人二十面相』第一回
- 14 前掲『怪人二十面相』第一回
- 15 松山巖『乱歩と東京』（ちくま書房、1995年）p.245
- 16 佐藤紅緑『ああ玉杯に花うけて』最終回（『少年倶楽部』昭和3年4月号掲載）
- 17 ピーター・B・ハーイ『帝国の銀幕』p.407
- 18 高桑法子「怪人二十面相論」（『国文学』1991年3月号掲載）p.67